寄稿

ネパール人留学生の日本語研修と留学生活

酒井 治孝*

1980 年に青年海外協力隊の隊員としてネパールに派遣されて以来、約 29 年間に亘ってネパールとの学術・文化交流と学校建設や奨学金支給などの教育援助活動を行ってきた。またネパール人の日本の大学院への留学の支援を行ってきた。本稿では、ネパール人留学生の日本語研修と留学生生活および帰国後の交流についての経験談を紹介し、日本語教育に関するいくつかの提言を行う。

キーワード：ネパール、留学生、専門日本語、文化交流

1．はじめに

私にとって初めての外国はネパールでした。大学院博士課程を休学して、青年海外協力隊のボランティアとしてネパールの国立トリブバン大学理工学部地質学教室に派遣され、講師として３年間勤務しました[1) 2)]。１年のうち半分は大学院修士課程（レベルは日本の学部に相当）の学生のため教壇に立ち、残りの半年は国土開発のための地質調査に従事しました。派遣前の語学研修では、同期のネパール隊員９人は現地語のネパール語を勉強しましたが、私は大学で英語で講義をすることになっていたため、私一人だけ英語の研修でした。ネパールの空港に降り立った時知っていたネパール語は、ナマステ（こんにちは）とダンネバード（ありがとう）だけでした。ブロークンの日本語英語でどうやって講義をするのか、そして２つのネパール単語だけでヒマラヤの山の中で、一人でどうやって調査をするのか、心配の種は尽きませんでした。しかし職場のネパール人の同僚や友人、そして調査のときのポーター達のおかげでネパール語会話を習得し、講義と調査を順調に進め、３年の任期を全うすることができました。この３年間のネパールでの体験は、その後の私の人生にとって大きな岐路となりました。

一方、協力隊活動を通じて社会の歯車がうまく噛み合っていない、多民族・多言語国家ネパールの現状を知ると同時に、多くの優秀な若者がその能力を生かしきれないまま埋もれてしまっているのを目撃しました。そこで日本に帰国する時には、この国の将来を担う理系の学生のため、今後も自分のできる範囲でネパールへの教育支援活動を続けることを誓いました。それから約 25 年が経過し、その間に 20 名余りのネパール人学生の海外留学のお手伝いをし、10 名以上が博士の学位を取って帰国することができました。また、調査地域の村に対する教育支援として学校校舎を５つ建設するお手伝いをし、奨学金の支給を続けてきました[3)]。

また 10 年程前には、日本に国費留学する中国の研究者の理系日本語教育のために２ヶ月間、長春にある東北師範大学の赴日留学生日本語学校の教壇に立ちました。経済開放政策で隆盛期に向かい始めた大国中国で、ヒマラヤの小国ネパールとは全く異なる経験をすることができました。本稿では中国での教育体験を踏まえながら、ネパールとの交流を通して理系の留学生に対する日本語教育と留学生活について経験したこと、考えたことを紹介し、いくつかの提言をしたいと思います。

2．日本語学習のモティベーション

2．1　なぜ日本語が必要なのですか？

「私は英語ができるのに、何故日本語の勉強をしなければならないのですか？日本の大学院といっても、英語で論文を書くのだし、読む文献も英語で書かれているのに、どうして日本語の研修を受けなければならないのですか？」と聞かれたことがある。これは来日して間もない、理系の留学生の口から出た言葉である。それまで 10 年以上私が接して来た留学生は皆、「日本

*京都大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻教授

に来て勉強するのだから、日本語を勉強するのは当たり前」と思っていたので、この言葉を聞いた時には、正直言って驚いた。

その時私は次のように答えた。「まず第１に日常生活のためには日本語はまず必要です。何故なら日本では皆が英語を喋れるわけではありませんから。次に野外に調査に行ったときや、他の研究室で実験装置を使わせてもらう時には、日本語は不可欠です。実験の手順や装置の使用方法を日本語で聞いて正確に判らなければ、実験装置を使わせてもらえず、研究を進めるのは難しいですよ」と。その返事に彼は頷いて聞いていたが、納得した表情はしていなかった。大学の研究室では、ほとんど誰でも英語が話せたからである。

その後、私はこう続けた。「それともう一つ、これは私の個人的な考えですから、君に押し付けようとは思いませんが聞いて下さい。あなたは日本に来て勉強するチャンスを得たのですから、自分の専門分野だけでなく、日本の文化や歴史、日本人の生活と習慣にも関心を持って下さい。日本の文化を知り、明治以来の近代化と第二次大戦による荒廃とその後の発展の歴史を知ることは、ネパールのこれからの発展を考える時にきっと役立つと思いますよ。私はあなた達に将来の日本とネパールの架け橋になってもらいたいと願っています。そのための第１歩は日本語ができるようになることです」と。

「日本の歴史や文学の研究なら日本語の習得は不可欠でしょう。でも、理系の私達に日本語が本当に必要なのですか？買い物やバスの乗り降りができる程度の日本語で充分なのではないですか？」このようなことを言う留学生がいる。

一方で、「短い留学生活、あるいは研修生活なんだから、日本語の勉強はそこそこにしておいて、良い研究成果を出して国際専門誌に英文で論文を次々に発表するようにしなさい」と言われる教員もいる。確かに国際コースと称する、講義や実験などの専門教育をすべて英語でやるような場合には仕方ないのであろうが、私としてはそんな場合でも日本の文化と生活に接する機会を積極的に作ってもらいたいと思う。

本人の語学に対する関心や意欲にもよるから一概に言えないが、日本語をしっかりと修得した学生の方が、専門分野でも良い成果を出し、日本でより豊かな生活を送り、帰国してからも日本との文化交流に積極的であるように思える。

２．２　来日前の日本語学習

日本に留学したいという学生や留学が決まった学生には、私は必ず「現地でできるだけ日本語の勉強をして、平仮名やカタカナだけでも覚えて、せめて自分の名前はカタカナで書けるようになって来日して下さい」と言ってきた。また、できるだけ国際的に評判の良い、英語で書かれた自分の専門の教科書を１冊読んでくるように言ってきた。特に留学のチャンスの限られた経済的に厳しい私費留学生には、選考の際に日本語で優位に立てるよう、しっかり日本語を勉強するように激励し、日本語の教材なども紹介して来た。

しかし、彼らにとって問題は、現地に日本語の学校が少ないことである。また学校が在ったとしても、必ずしも正しい日本語を教えることのできる先生がいないのである。また首都以外の地方都市に住む学生にとっては、日本語の学校は望むべくもない。

このような状況を改善する一つの手だては、安価で良い日本語教材を入手して、自分で勉強することである。ところが日本語の良い教材は、現地では必ずしも入手できるわけではない。日本語学校で使われている教材にしても、とても現在の日本では使われていない一時代前の教材が使われたりしている。

これだけインターネットが発達した時代であるから、日本の留学生センターなどで使われている日本語教材を大学のホームページからダウンロードすることなどができれば、留学前の日本語の勉強には大いに役に立つのではないだろうか？

３．日本語研修と大学院生活

３．１　正しい日本語の基礎と応用練習

日本語初学者の研修にとって重要なのは、正しく丁寧な日本語会話ができるように、その基礎を作ることと、研修したことを実際の生活の場で反復練習し、応用力を高めることであろう。おかしな日本語や良くない日本語表現を一旦覚えると、それから抜け出ることは難しい。正しい日本語を話せるよう、厳しく指導し

てくれる教師に対しては、留学生達は一目を置いていたし、そんな先生に限って優しく学生を見守って下さっていた。

故国から遠く離れ、一人で留学生活を始めたばかりの学生にとって、毎日の生活は不安に満ちたものであり、時にホームシックにかかる学生や精神的におかしくなる学生もいた。そんな学生に対し、自宅に呼んで食事をしながら指導して下さった方や、お金のない私費留学生のために、日本語検定の試験前特訓をボランティアでして下さった方もいた。日本留学の初期に研修で出会った、母の様な慈愛に満ちた女性の日本語教師のことは忘れがたいようで、帰国後もその先生の近況を尋ねられることは多い。

４月から日本語研修を始めた留学生にとって、夏休みは一つの障壁であった。多くの国費留学生は経済的に恵まれていたので、故国に里帰りしていたが、経済的に苦しい私費留学生にとっては、アルバイトをして学資や生活費を稼ぐ重要な期間であった。３ヶ月の研修で日本語の基礎を終えた留学生のうち、故国に帰った者の多くは、９月に日本に戻った時にはかなり日本語を忘れかけていた。一方、日本人社会のなかで必死にアルバイトをやった者の中には、毎日の仕事という実践の場で日本語を使い、格段に日本語が上達した者がいた。私が私費留学の身元引受け人になった学生の一人は、職場で理解のある年配の日本人に恵まれ、夏休みが終わった後は見違えるほど日本語がうまくなり、研修最後のスピーチ大会では優秀賞をもらった。このように、基礎を作ったあと、休みを利用して働きながら日本語の応用練習ができるようなインターン制度があれば、日本語研修はもっと充実したものになるのではなかろうか。

中国で専門日本語を教え始めた時に驚いたことがある。早朝の１時限目の授業のために建物の中に入った途端、どこからともなく一斉にお経を唱える様な音が聞こえて来た。その音をたどって階段を登ると、それは３階の教室で授業前に学生達が自主的に教科書を音読している声であった。

またネパールの田舎の家に泊めてもらった朝６時頃のこと、土間の方からしきりに何かを唱えている声が聞こえる。その声の主をたどって土間の外に行くと、その家の小学生が寄宿学校の英語の教科書を音読していた。その文章は現在完了形で書かれていることに二度驚いた。恐らく現在完了形の文法については習ってない小学校低学年の子供が音読を繰り返す姿を見て、日本より英語が社会全般に行き渡っており、複数の言語を上手に操るネパール人の秘密をかいま見た気がした。つまり、声に出して単純な文章を反復練習することが、外国語の学習では大切なことなのだと。

中国ではカラオケは日本同様、大変人気のレクレーションであり、赴日留学生日本語学校の中国人学生の多くは、日本の歌を上手に歌っていた。漢字文化圏の中国の留学生は歌詞の意味もすぐに判り、感情移入もし易いメロディーなのでカラオケがうまいのは理解できた。しかし非漢字圏のネパールからの留学生のなかにも、カラオケがうまい者がいた。日本語の研修にカラオケをもっと利用して良いのではないかと思う。

留学生の子供達は保育園や幼稚園で童謡を習う一方、テレビのアニメ番組の主題歌などを実にうまく歌ってくれる。彼らは両親と故国に帰ると、日本語は忘れるようだが、日本で覚えた歌は覚えている。また、短期間の研修生の多くは、帰国後すぐに日本語は忘れてしまっているが、日本のカラオケだけは忘れずに歌っている。私がインドの年配の大学教授と話した時には、急に「やーまのおてらのかねがなるー」というメロディーを口ずさまれて驚いた。日本占領下のビルマで育ち、日本語の歌を覚えたのだと言う。このように日本語は忘れようと、メロディーと一緒に覚えた歌は半世紀経っても覚えているのである。もっと日本語教育に歌とカラオケを使ったら良いのにと思う。

３．２　専門教育の日本語

専門分野の日本語は、一般の日本語研修では勉強しない。しかし、自分の専門分野の日本語や用語を組織的に覚え、使えるようになることは、大学院での研究の幅を広げるだけでなく、帰国後も役に立つことが多い。確かに大学院の研究で使う多くの理系の用語は、英語さえ知っておれば論文を書くためには事足りる。しかし、日本の民間業界や官公庁では、英語の用語が使われることは少なく、ことに現場では日本語の用語一辺倒である。英語の論文を書いて大学院で学位をと

っても、帰国後日本の企業と共同で仕事をするような場合のことを考えると、日本語の用語を知っていることは重要である。

理系の大学院の研究生活で、わざわざ日本語の用語について勉強する機会は多くない。土木関係の勉強をしていた一人のネパール人留学生は、指導教授が雑務で忙しくなかったお陰で、日本語で書かれた専門書を使って、専門用語についての解説を受けながら日英対応で専門用語を組織的に勉強する機会に恵まれた。そのお陰で土木の現場に行って、英語が苦手な日本人技術者と日本語で話すことができ、研究にも大いに役に立ったという。研究室に所属し、自分のテーマについて研究を始めた頃に、専門日本語を集中的に勉強する機会を作ることは大切である。

3．3　教員・院生とのコミュニケーション

外国人留学生にとって、日本語であれ英語であれ、研究室のメンバーとのコミュニケーションは大切である。大学院での研究がうまく行かないとき、その原因の多くはコミュニケーション不足に求められる。コミュニケーション不足にならないためには、日本人学生同様、いやそれ以上に「ほうれんそう運動（報告・連絡・相談）」を徹底することが一番である。うまく日本語で表現できない留学生にとって、研究上の行き詰まりや人間関係の悩みを聞いてくれ、相談できる人物の存在は重要である。

自分の実力を過信したり、自国の文化や習慣にプライドを持っているために他の文化、例えば日本の文化に柔軟に対応できない留学生への対応は難しい。日本語が良くわかっていないせいか、何回言っても同じ間違いを繰り返す留学生や日本式の大学院生の共同生活に慣れない留学生は、研究室の中で次第に孤立化し、疎外感を強めると同時に厄介者扱いされることになる。

国立大学の法人化後、大学教員の研究・教育以外の事務的な雑用の時間が激増し、留学生の世話が充分にできないような状況が生まれている。留学生の指導教員のなかには、隣の部屋に留学生がいるにもかかわらず、「私は忙しいので連絡・相談はメールでお願いします」と公言している教授もいるようだ。このような教育・研究環境下で 30 万人留学生計画が声高に叫ばれているが、このまま留学生数を増やすだけでは、留学はしたものの日本のやり方に馴染めず、反発だけ感じて帰国する者が増えるのではないかと危惧している。これからの日本の大学院の経営ということを考えると、海外からの留学生を増やすことは重要であるが、まずは教育・研究活動を行う環境の改善が必要であろう。

4．家族の日本語と文化交流

4．1　奥様たちの文化交流と日本語

留学生の多くは妻帯者であり、家族持ちである。博士号を取得するつもりで来日しているので、修士課程を含めると５年以上の長期滞在となり、家族を日本に呼んで一緒に生活していることが多い。従って、博士論文が順調に仕上がるかどうかの鍵の一部は、家庭生活が握っているとも言える。大学院での研究生活の疲れや悩みを癒す場として、家庭生活は重要である。

また日本滞在中に妻が妊娠し、日本の病院で出産することもある。この様な場合、妻も留学生本人も、日本の社会システムの中にある病院で出産することになり、充分な日本語でのコミュニケーション能力が必要となる。また、出産・育児を通して、日本の保健医療のやり方や夫婦のあり方を学ぶ機会になっているようだ。第２子を日本の病院で出産した留学生の奥さんは、「ネパールだったら出産しても直ぐに働かないといけないし、赤ん坊の面倒も自分で見ないといけない。それに比べて日本の病院は何から何まで世話してくれて、天と地の差だ」と言っていた。

さらにその後の育児を通して、日本の夫がいかに出産後よく手伝ってくれるかを知って、ネパール人の夫に家事・育児協力を求めるようになった。ちなみにネパールのブラーマンの家庭の大部分は男社会であり、女性の地位は低く家庭から出ることは少ない。彼女は地域の活動や日本人女性との交流に非常に積極的で、子供達の通う小学校や幼稚園の催しにも積極的に参加し、留学生自身よりはるかに文化交流に貢献していた。料理・手芸教室からピアノ教室まで参加し、多くの友人を作り、帰国後も日本人の友人との交流は続いている。彼女がこのような友人の輪を作れたのは、来日直後に受けた、留学生会館での日本語教室のおかげである。日本語研修の期間は留学生よりずっと短く、研修

のレベルも低かったが、帰国時には押しなべて、奥さんの方が留学生の夫より日本語がうまくなっている。

ネパールでは、異なったカースト間や民族間で家族が交流するというのは極めて限られる。ところが、ネパールではまず起こりえないような、ブラーマンの家族とモンゴロイド系の家族が交流し、互いの料理の作り方を教え合うというようなことが、留学中の家族の間では生じていた。彼等は帰国後も家族間の交流を続けており、日本での留学生活がネパール社会の変革に一石を投じているように思える。

4．2　子供たちの生活と日本語

幼児期に日本にやって来た、あるいは日本で生まれた留学生の子供たちの多くは、日本の保育園、幼稚園、小学校で教育を受ける。子供達の順応力は高く、半年もすると両親より上手に日本語を喋るようになる。留学生の家族同士が集まってパーティーを開いたときなど、子供達は共通語の日本語でワーワーとお喋りしたり、ゲームをしている。しかし両親達は子供達の日本語会話に入っていけず、大人は隣室でネパール語で話しているというような状況が生じる。また、公共の住宅施設に入っている場合など、管理人さんや組長さんからの話が込み入って分からないときなど、子供が両親に代わって説明してくれている。

ただ子供はテレビや友達の影響が多く、汚い言葉遣いや子供の間での流行語を良く使う。また方言と標準語の違いが分からず、方言を標準語だと思って見事な博多弁を使っていることもあった。私が両親とネパール語で喋っていると、「シェンシェイ（先生）、アンタハニホンジンヤロ。チャントニホンゴデシャベランネ！」と叱られたこともあった。

その同じ子供が日本語で書いた作文は、作文コンクール小学生の部で優秀賞に選ばれた。その内容は『肌の色』についてであった。彼女は肌の色が黒いことでクラスの友達から悪口を言われた。そのことで担任の先生に相談すると、先生はクラス全員を集めて次のように話されたという。

「肌の色が黒い人も、白い人も、黄色い人もみんな同じ人間です。黒くても白くても皮膚の色は同じ肌色なんです。肌の色で人間を差別してはいけません」と。

その時のことを書き綴った作文であった。小さな留学生の子供が、日本人の子供達に人種や肌の色の違いについて考える、本当に良い機会与えてくれたと私は感謝した。後日、この作文はラジオでも放送された。

多くの子供達はこのように日本語を使いこなし、日本人社会に溶け込んで生活していたが、母国語をほとんど忘れてしまうこともあった。私は帰国すると彼等がネパールの学校に戻ることを考えて、できるだけ家庭ではネパール語を使い、両親が先生になってネパール語の勉強をさせるように指導した。ただし、ネパールの言葉は勉強できても、ネパールの社会や暮らしぶりについて学ぶことは難しく、テレビでネパールやヒマラヤの紹介番組を見ては、驚きの声を挙げ、両親に素朴な質問をしていた。例えば、

「何であの人達は靴を履いてないの？」

「汚ーい！　牛のうんちを手ですくって壁にすり付けるなんて（乾燥して燃料として使用）」と。

しかし帰国後の順応も早く、ネパール社会に適応できなかった帰国子女の話はこれまで聞いたことがない。

4．3　日本での異文化体験と留学生活

留学生は日本滞在中に日本の文化とぶつかり、時に驚き、時に感嘆の声を挙げたり、崇敬の念を持ったりする。その体験を帰国間際にまとめ、出版することができれば、次の世代の新しい留学生達はそこから多くの教訓を学びとることができるであろう。

例えばある留学生は、公営住宅に入居するにあたり保険をかけさせられたが、それが何故必要なのかが理解できなかった。ある時彼の家族は、トイレの水が止まらず流れっ放しになっているのに気づかず、全員外出してしまった。数時間後、奥さんが帰宅するとすぐに下の階の住人から苦情が来た。

「お宅の水が溢れ、私の部屋の中は水浸しだ。使えなくなった電気製品について弁償しろ」と言われた。

その時初めて奥さんは、部屋に保険をかけた意味が分かったと言う。さらにこの件につき留学生センターの指導員さんに相談したところ、

「直ぐにお菓子（菓子折り）を買って、その家にもう一度謝りに行きなさい」と言われ、菓子折りを持って階下の家を訪ねたところ、予想外に優しく対応してく

れ、弁償額も思ったより少なくて済んだと言う。この経験を通して彼は、日本の菓子折り文化を学んだのである。小さな菓子折りが、対立した人間関係を少し和らげる役をしてくれるということを。

留学生はこの種の体験を日本滞在中に沢山やっている。このほろ苦い経験や首尾よく行った経験に関する思い出を、日本語教員あるいは留学生センターなどが中心になってまとめ、ホームページなどに掲載して頂けると留学生生活の生きた手引きになるのではなかろうか。

5．帰国後の交流と活躍

5．1　帰国後日本語が上手くなった日本留学生会会長

多くの国費留学生は、帰国後母国の政府関係機関に復帰して活躍している。しかしバラバラの機関に所属しているので、連携して活動することがなかった。そこで日本に留学中から、ネパール人留学生会を組織し、活動することを私は奨めた。

中国からの留学生会のように、歴史のある巨大な組織は在日中の留学生のアルバイト斡旋や奨学金獲得などに際し、その情報ネットワークを最大限に利用していた。しかしネパールのような小国の留学生については、そのようなネットワークがなく、個人で道を開拓するしかなかった。また帰国後、日本の援助事業に関係する際や日本の大学との共同研究をする際、そしてポストドクターとして日本を再訪問する際など相互情報交換し協力できるように、日本に留学した経験のある者でOB組織を作っておくことを提案した。

その会長に就任した留学生に２年振りに会った時に驚いたことは、彼が非常に社交的になり、日本にいたときより日本語が旨くなっていたことであった。何故なら工学部に所属していた彼は、博士論文研究中は実験やその解析に忙しくて、研究室ではそれほど日本語を使う必要もなく、文化交流など眼中になかったのである。ところが、帰国して日本の民間企業や援助団体、大学などと交流するための責任者になった途端、彼はネパールにいる日本人に会って話をする必要がでてきたのである。日本人とよく会って話をするようになったため、日本語が旨くなり、日本人や日本の組織の考え方が良く分かるようになったのである。

このように、一応の基礎がしっかりできておれば、帰国後でも日本語が旨くなることがあるのである。

一方、私が青年海外協力隊から帰国後、最初に留学のお手伝いをしたのは、私の教え子の中でも最も社交的で、英語もしっかりできる学生であった。留学先の日本で、修士課程から博士課程に進学する時に大学を変えねばならなかったので、経済的に苦労した時期もあった。また博士論文をまとめている最中に阪神-淡路の震災に遭い、観測データの収集に苦労した。しかし持ち前のバイタリティーと人柄の良さで困難を乗り切り、「大阪平野の地下水の収支」という水門地質学の分野の論文を完成させ、博士号を得た。

彼は大阪市とカトマンズ市の文化協力の象徴として、カトマンズに図書館を建設する際に大いに活躍してくれた。またネパールの井戸水のヒ素中毒問題や河川の環境汚染の分野でも、日本のみならず諸外国と協力しながら活躍している。彼はネパールの首都カトマンズで、代々商売に従事してきた家の出身であり、誠実な上に人の心を摑むのがうまく、語学が堪能であった。このように言葉が堪能で、社交性にとんだ留学生は、帰国後も間違いなく専門分野においても文化交流においても活躍している。

5．2　帰国後の留学生と日本社会

このように帰国後も日本との交流を継続している留学生は多い。帰国後、僻地の支所に配属された元留学生は、日本語の力を維持するため、短波の日本語放送やNHKの海外向け放送を毎日聴いていたという。そんな留学生から毎年年頭に届く、丁寧な日本語で書かれた年賀状には頭が下がる思いである。彼等が帰国後も日本に向け熱い眼差しを向けてくれているのであるから、母校の大学や最初に日本語を学んだ留学生センターなどから、英語あるいは日本語で書かれた大学の近況を伝えるリーフレットなどを毎年送るなどして頂けないものかと思う。その点ヨーロッパやアメリカの大学は、自分の大学を卒業した留学生に対するアフターケアが充実しており、広報誌などが定期的に届いているようである。

在ネパール日本留学生会の会長からは、次のようなことを訴えられた。

「日本の在ネパール政府関係機関や民間企業は、もっと日本に留学した経験のあるネパール人を優先的に雇用して欲しい」と。

その点、欧米の在ネパール機関は積極的かつ優先的に自国の大学卒業生を現地採用してくれるということであった。今後、日本への留学生を増やすだけでなく、元留学生を現地で雇用し、日本で学んだ知識と経験を発展途上国の開発に生かすという戦略も持ってほしいと思う次第である。

謝辞

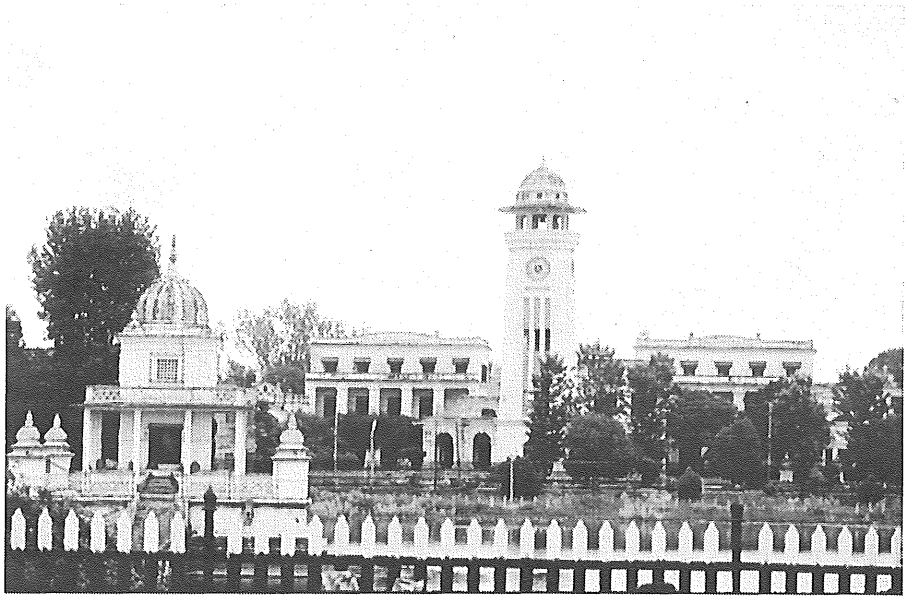
本稿を執筆する機会を与えて頂いた、『専門日本語教育』の因京子編集委員長に感謝する。なお本稿で取り扱った留学生は、筆者が九州大学在職中に関係した者達であり、同大学の留学生センターで日本語研修を受けたことを付記する。

参考文献

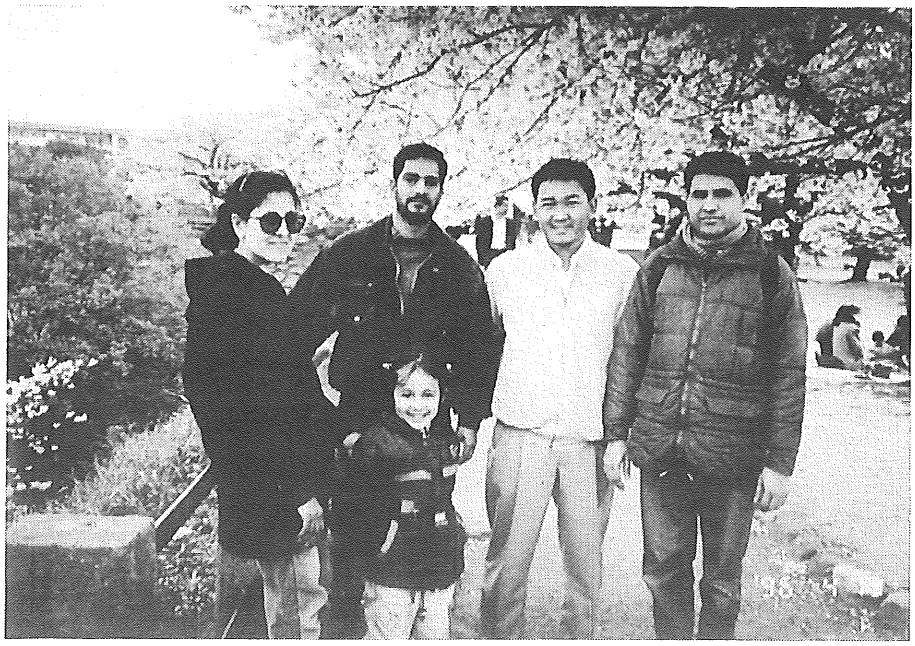
1) 酒井治孝: ヒマラヤに挑んだ1000日,「青年海外協力隊-地球サイズの青春」, 三修社 (1985)

2) Harutaka Sakai: Instructor of Geology in Nepal, Asia Pacific Community, No. 31, 82-90, (1986)

3) 酒井治孝: ネパールの教育事情, 出版ダイジェスト, 第1663号, (1997)



協力隊員時代（1980-1983）に筆者が講師として勤務していた、ネパール国立トリブヴァン大学トリチャンドラキャンパスとその中央の時計台



九州大学に留学していたネパール人留学生とその家族。現在ネパールで日本留学生会会長を務めるバッタライ君（右）と九大留学生会会長を務めたニマ君（右から二人目）。左端のジョシー君からは毎年、漢字で書いた丁寧な年賀状が届く。

ネパール人留学生とその家族と一緒に宗像市の竹山で筍掘り。中央のリシカちゃんは小学校の時に作文コンクールで優秀賞を受賞

工学博士の学位をとって帰国する留学生の送別会に集まった福岡在住のネパール人留学生達。中央の膝の上の子供二人は、日本留学中に生まれた。